第 2 部

各地からの報告：東京都内各地の生息繁殖状況

3. 北多摩地区：板谷 浩男氏（㈱緑生研究所）

保護ではなく開発の関係の調査に携わっている。その中で得た情報を報告したい。北多摩はほとんどが武蔵野台地に位置しており、住宅地と農地のほか、小さな林が残っている。北の方は狭山丘陵があり、樹林ではないが大きな空間が広がり特殊な地域である。

開発が進み、雑木林が減少しているため、オオタカが営巣地としての利用できるような地域は減っている。オオタカが繁殖可能な林は、保全緑地、学校の林、公園、研究所などの土地利用がなされているところに営巣している。ひとつの営巣林がなくなると繁殖できなくなるような地域が多い。我々が確認した 25 の営巣地について、巣から半径 1 キロメートル以内の土地利用状況についてクラスター分析でグループ分けを行った。ほとんど市街地の周辺に巣がある状況である。土地利用としては、市街地 27%、広葉樹林 26%　都市緑地（ゴルフ場・公園等）21%、耕作地 11%が多かった。一般的な営巣樹林である針葉樹林は 8%と少ない。

クラスター分析の結果､オオタカの生息する樹林のタイプを 4 つに分けることができた。それぞれ樹林のタイプは、市街（郊外）タイプ、市街（独立林）タイプ、樹林タイプ、人工緑地タイプと名づけた。郊外は樹林地がまばらにあるところです。市街地は完全に独立林に営巣しているところ。樹林は連続樹林地（今回だと狭山丘陵です)、人口緑地は特にゴルフ場をこのカテゴリーに入れている。このように分けた意義だが、オオタカを保護する上で、独立林と樹林タイプを一緒に考えるのは保護方法が異なるため無理がある。独立林で代替巣をと思っても、林が開発対象になると手の打ちようがない。これらのタイプは地形とも対応しており、郊外タイプは武蔵野段丘、独立林タイプは立川段丘～武蔵野段丘、樹林タイプは狭山丘陵、人工緑地タイプは武蔵野段丘～狭山丘陵に位置している。

独立林とか都市公園などで観察をしていると、繁殖の失敗の原因としてカメラマンが脅威となっている事がわかる。カメラマンによる過剰な観察によってオオタカが繁殖を放棄している例を多く見かける。SNS のツイッターでオオタカが見られそうな地名や写真をのせてしまい、観察場所を特定することができてしまう。オオタカの生息場所の情報が漏れてしまっている。そこに鳥の知識のないカメラマンが多く来てしまうという問題がある。